

# 4 入力した文字を表示してみよう

ここでは、「prompt()」メソッドを使います。

## prompt() とは

ユーザーが直接入力した文字列を変数の値にします。

prompt() のように使い、()内には表示させたい文字列を入れます。

### 1 サンプルプログラムを入力します。

#### サンプルプログラム KIHON01.HTML

```
<html>
<body>
<script>
var s=prompt("あなたの名前は?");
document.write("もしもし、".s."さんですか?");
</script>
</body>
</html>
```

## 変数とは

値を代入する箱のようなものです。箱のことを変数名といいます。値には、数字や文字列が入ります。例えば、次のようなステートメントの場合は、以下のようになります。

```
var s = "電卓";
```

- ・ var は変数の宣言で、省略可能。
- ・ s が変数名、"電卓" が値。
- \* 文字列はダブルクォーテーションマークで囲みます。

ここでは、ユーザーが入力した文字列または数字が変数 s の値になり、document.write メソッドによって表示されます。

## document.write ()

()内の文字列などを表示するメソッドです。

()の中に複数の文字列を並べるときには、「+」で区切ります。write メソッドの場合には、「,」(カンマ)で区切ることもできます。

### 2 ファイル名「KIHON01.HTML」で保存します。

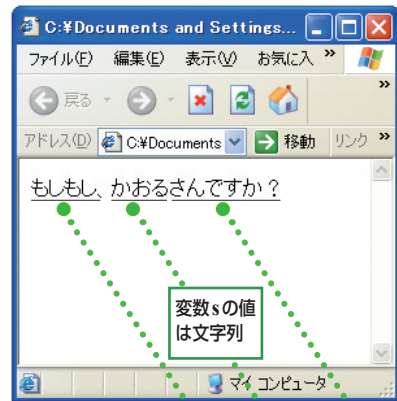
### 3 プログラムを実行して、文字を表示します。

① ユーザープロンプトに名前を入力します。



② OK を押します。

③ 下のように表示されます。



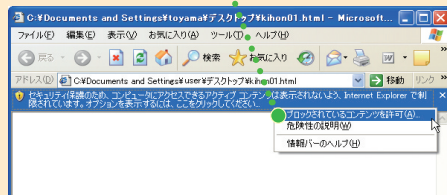
## 基本命令

```
document.write ("もしもし、".s."さんですか?");
```

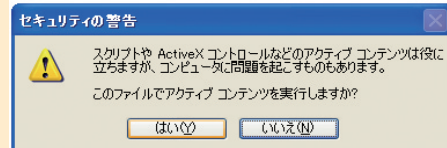
## 注意

こんな警告が出たら・・・

① ここをクリックして【ブロックされているコンテンツを許可】を選びます。



② 【このファイルでアクティブコンテンツを実行しますか?】に【はい】を選びます。



# 5 数字の列を数値に変換しよう

ここでは、「parseInt()」を使います。

## parseInt() とは

数字の列を数値に変換します。

例) parseInt("81")+parseInt("3") は 84 となります。

parseInt(数字の列) のように使います。

"81"+"3"

は "813" となります。

### 1 サンプルプログラムを入力します。

#### サンプルプログラム KIHON02.HTML

```
<html>
<body>
<script>
n=parseInt(prompt("nを入力して下さい"));
for(i=0;i<n;i++) {
document.write("i=",i);
}
</script>
</body>
</html>
```

## for 文

for 文を使えば、繰り返しの処理が指示できます。

```
for (変数の初期化; 条件; 増分値) {
実行される処理;
}
```

のように使います。

左の例でいうと、

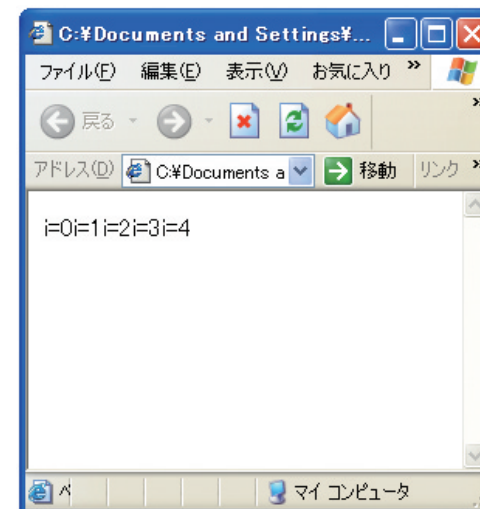
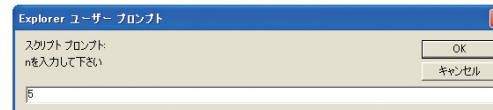
変数 i は初期値として 0 が代入され、

i が n 未満であれば、処理が実行されます。

i++ は 1 回処理が実行される度に i が 1 増えるという意味です。

### 2 ファイル名「KIHON02.HTML」で保存します。

### 3 プログラムを実行して、文字を表示します。以下のように表示されます。



もし 2 ずつ増やしたい場合は、i++ を i=i+2 とします。

小数点を含む数字の列のときは parseFloat (数字の列) を使います。

## ためしてみよう

摂氏の温度を C、華氏の温度を F とすれば、 $F=C \times 1.8+32$  が成り立ちます。

摂氏の温度を入力して華氏に変換するプログラムを作ってみよう。